

特集

作業療法における 作品づくりの意味

特集にあたって

わが国で作業療法がはじまったころ、作業療法室には機織り機があり、ろくろがあり、ADL室と同じくらいの存在感をもっていた。近年、入院期間が短縮されたり、いろいろな治療アプローチが展開される中で、木工、陶芸、手工芸、絵画等の activity を使った作業療法の影が薄くなってきているように感じる。作業療法の実際は、身体機能や精神機能の回復・発達、生活能力の獲得、社会参加等々、幅も広げれば奥行きも深い。

“作業療法士は諸活動を通して（または使って）、障害がある人の治療・支援をしていく……” というような文言に関心をもって作業療法の門をくぐった人も多いと思う。今回の特集では原点にもどって「作業療法における作品づくりの意味」を取り上げた。障害が重くてもこんなに作品づくりを楽しめる。高齢になってもこんな形で社会とつながってられる。創作活動は、自分自身の存在意義を確認し、他者とのつながりをもつくっていく。その意味は深い。今回の報告を通して、あらためて、「作品づくりの意味」を考えさせられた。これをきっかけに日本中で、また作品づくりが広がるとうれしい。

（宮崎明美）

作業療法における作品づくりの意味

作品づくりがもたらす影響—老人保健施設での事例を通して

作業の向こう側—認知症高齢者における作品づくりの意味

創造的な作業活動がもたらすもの—身体疾患を合併した精神障害のある方への支援

作業療法における作品づくりの意味—重症心身障害児施設でのグループ活動から

すずちゃんと幸せの青い鳥—重度の心身障害がある子どもとの絵画活動

コラム：青い鳥の絵がくれたもの

コラム：作品づくりによる患者さんの変化

企画
担当

宮崎明美（児童発達支援センター みどり学園，作業療法士）

中村春基（兵庫県立リハビリテーション中央病院，作業療法士）